

# 私の農場のゴム園

竹澤潤二郎

## はじめに

生家は農業に携わっていなかったが、私は戦後移民としてブラジルに渡ってきた。今までに色々な出来事があった。ブラジルでの開拓とは森をなくして牧場や農地を造成することである。しかし、森をなくしてまた森を作るということも、開拓者の仕事の一つである。

学名が *Hevea brasiliensis* といわれるよう、ゴムはブラジルが原産国である。今から約 120 年前、マナウスからゴムの苗木 20 数本が東南アジアへ持ち出されて、そこでゴムの植林が始まり今日の隆盛を得ている。ブラジルはゴムを持って行かれた代りにという訳でもあるまいが、逆に東南アジアから胡椒と紅茶を初期の日本人移民が持ち込んで輝かしい成功を勝ち得た話は余りにも有名である。

ここでは、現代人の人跡の乏しい未開の地域での農園開拓の一つとしてゴム園造成の紹介を通して、ブラジルの森に対する私の気持を紹介してみたい。

## 開拓の始まり

私の農場 (Fazenda) は、サンパウロ市から車の走行距離でいうと 2,200 km 北上したところにある。そこは、マットグロッソ (Mato Grosso) 州の首都クヤバ (Cuiaba) 市からまだ北上して 500 km の地点で、南米地図でみれば、ほぼ中心点にあたる。面積は約 1,500 ha、この農場で 1980 年に開拓を始めた。

クヤバ市の人口は当時約 7 万人、街の中は所どころ舗装されていたが、街から出て農場に至る道はまだ土の道で、雨が降って悪くなった道路にはまり込んでしまうと、泥道に座り込んでしまったトラックと共に一週間も、近くの街や

---

TAKEZAWA, Junjiro : Rubber Plantation of my Farm

レストラン歩栄野 (ぶえの), サンパウロ市, ブラジル

クヤバ市からのトラクタや牽引車の救援を待たねばならなかった。その間ブヨや蚊と戦いながら自炊して救援部隊が来るまで待つより外に仕様がなかった。その時の苦労は身をもって経験した者でないと解らない。その立ち往生する泥んこの道路を舗装しないと車は通行できないから、後から着いた車の列は往復数キロに及んだ。

1985年までは、農場の所属する郡はダイヤの出るという意味のヂアマンチーノ (Diamantino) 郡だった。その後、小さな集落だったサンジョゼ・ド・リオクラーロ (San Jose do Rio Claro) が発展してそのまま郡になった。今の郡である。その街から農場まで 200 km ある。1990 年にその中間の集落が発展してノーバマリンガ (Nova Maringa) 郡が出来た。産物は主に木材、牧畜である。この町は人口 8,000 人位だが、町役場も保健所も小学校も出来ている。この町が出来る同じ頃、農場の手前 7 km のところにブリアノルテ (Bria Norte) という集落が出来た。人口 700 人位だが小さなスーパーマーケットまで出来ている。おまけに電話局まで出来た。ヂアマンチーノから農場まで 30 km, 10 年間に二つの郡と一つの町の誕生で、いかにブラジルの開拓の速度が早く進んでいるかが解る。

人口の増加も忘れてはならない。私が農場を開拓した当初と比べると隔世の感がある。電話するとなると 300 km も離れたヂアマンチーノへ行くか、20~30 km 離れた他人の農場まで行って無線で連絡して貰うかするのだが、直接本人とは話は出来ない。こんな調子だから農場に入ると世間とは完全に遮断される。私はクヤバから 500 km の農場まで四輪駆動とピックアップ車で行き来した。

雨が降って道が通れない時など車をその場所に置いて、数人の人夫と共に 25 km 以上の森林の中の道をサトウキビから作るブラジル特産のピンガという強い火酒を飲みながら荷物を背負って歩いたものだ。近ごろ世間の人は雑忙から逃れて電話とテレビのない所へ行きたいというが、私は原生林の大きな魔力に魅了されて、日本人も居らないとんでもない奥地の森林の中へと飛び込んでしまった。

### 私にとっての原生林

私にとって、森は緑の迷宮であり、神秘のエネルギーの充満した、正に感動の世界であった。森に入ることは、私の秘められた胎内回帰願望だったのかも知れない。その森は文明人が入ったことのない原生林、原始の森である。他人

は私にこんなところで孤独で寂しいことはありませんかと聞くが、とんでもない、私はここですべきことは山程あるし、森の中には実に素晴らしい樹木がある。ちょっとそれらの名前をあげてみよう。

Cabriuva, Canafista (*Cassia* 属), Candeia, Faveiro, Garapera, Guaicara, Imburana, Olho de Cabara (*Ormosia* 属), Pau Brasil (*Caesalpinia* 属), Pau ferro, Seca, Sucupira (*Bowdichia* 属) (いずれもマメ科), Peroba, Perobapaca (ともに *Aspidosperma* 属, キョウチクトウ科), Ipe (*Tabebuia* 属), Jacaranda (同名属) (ともにノウゼンカズラ科), Castelo (*Calycophyllum* 属, アカネ科), Aroeira (*Myracrodroon* 属) Caju' Canelao (カシュー?) (ウルシ科), Cafezinho (クロウメモドキ科), Articun, Pindaiba (ともにパンレイシ科), Canela (クスノキ科), Cedro (センダン科)<sup>(注)</sup>と挙げるのにいとまがない。この中には何十年も腐らない木、素晴らしい林になる木、この世のものとも思えぬ美しい花を咲かせる木など素晴らしいという一語につきる。中でも面白い Figueira という木は隣に立っている木に絡まるように抱きついて、しまいには絞め殺してしまうのだ。抱きついている間は他の木の養分を吸い取り、枯れてしまうと肥料にするらしい。

しかし、この木にもかなわない木がある。高さは 30 m を超える大木になる Barriguda (*Chorisia speciosa*) という木である。この木に抱きついて絡んで行くと、しばらくの間じっとして耐えて逆にしっかりと締め付けさせるのだ。そ

して、締め付けさせた自己の部分を太らせて切ってしまうのだ。それは弾けるように切るのだから恐ろしくて木とも思えない。この木には、寄生植物や蔓類などは自分の木肌に寄せ付けないという面白い特性がある。太陽や月や星の輝きに感心して興味を持てば、森の自然の中の鳥、地上の動物、虫達、そして木や草までが親切に教え導いてくれるのだ。そして彼等は私達人間に必要な、有効な薬まで与えてくれている。これらのことは、我々文明人と同じ歳月を文明に頼らず生き続けているインディオ（原住民）の生活に学べばわかる。将来、この森の中から癌やエイズに効く何かが見つか



写真 1 植栽されたゴムノキ

る可能性もある筈である。とはいっても、現実には幸か不幸か、私も生身の文明人であるこの大自然を眺めているだけでは生活できない。そこで、農場の一部を開墾してゴムの木の植林をすることに決めた。

### ゴム農園の造成

当時ブラジル政府もゴムの植林を奨励していたので融資を受けることにした。政府の方針で  $13^{\circ}\text{S}$  以南であれば融資を受けられるという。この表現の仕方が面白いと思った。

数週間かかって融資の手続きを終えて、サンジョゼ・ド・リオクラーロの街に出来た連邦銀行に融資金の一部が出たので、いよいよ植林を始めなければならない。持続可能な開拓だから森を切る罪も許されると思い込んで、大きな森林部分を出来るだけ避けてチェーンソーを使って伐採する。

植え付け面積は 30 ha、植え付け間隔は  $3\text{m} \times 7\text{m}$  だから 30 ha の中におよそ 14,000 本余りの植え込みである（私は狭いと思う）。苗木は接ぎ木された 2 年ものである。伐採が終わり木を切り倒したままの状態で 1~2 度の降雨を待つ。降雨による水分を受けることによって残った切り株からの萌芽発生を促す。また、日照りを待って切断された地上部がより乾燥した頃を見計らって火を放つ。こうして、再生した部分を含む根の部分と切り倒された幹部分を一度に焼き払うのである。要するに焼き畑の方法である。根の部分が生きていると後々新芽の除去に手間がかかる。

今度は焼き払われたところにコーバ (cova, 穴) 挖りである。これにはカバディラと呼ばれる手動の簡単な穴掘り機を使う。直徑 15 cm、深さ 30 cm に掘り、ここに苗木を植える。一人一日平均で 200 穴を掘るから 30 ha を 10 人で丸一週間以上かかる。この接ぎ木された苗木は政府の指導局から配分されるが、私の農場から 200 km もある苗畠まで受け取りに行かなければならぬ。雨季を利用して植林するから当然道も悪くなる。その上苗木を積んだ車は一層重くなるからすんなりとは往復できない。それどころか、農場の手

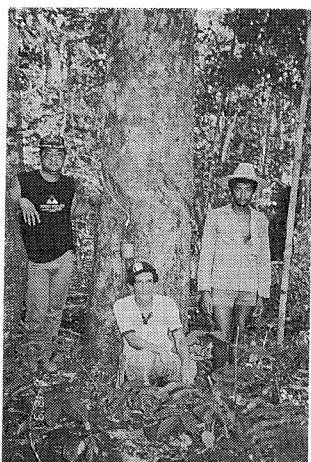


写真 2 農場の中にある天然生のゴムノキ

前 26 km にある窪地は通過できないので、乾季の間に手前の方にトラック一台を用意して、苗畑からは別のトラックで運んできて窪地のところで積み替えた。その窪地では足がぬめり込み人間さえも渡るのが精一杯で、積み替えるには骨が折れた。

そんな必要もないが、日本に住んでいる人達には出来るものではないと思った。あれから 16 年が経ったが、ブラジルの農業に携わる者さえ、文明化が進んだ今となっては、同じことをやれといわれてもする人がいるだろうか、疑問である。

さて苗木の配分は、当局の方からは、当初決められた本数だけしか配分がない。本畑（農園）に植えた後はどうしても欠株が出るので自分の農場で欠株を補給せねばならず、苗床を確保せねばならない。そのために私の農場で一人の接ぎ師を雇う必要があった。彼は接ぎ木をする一週間から 10 日くらい前の間、俗界から離れ、清水で身を清めながら食物も選択し、禁欲生活をしながら新月から満月までの間を選んで接ぎ木をした。接ぎ木はいかに器用さをもってしても、その人次第では活着率が落ちるらしい。私の接ぎ師の場合、活着率が実に 95% 以上であった。こうして苗木を本畑に植え終わるまで色々な出来事があったが、忘れられないことが一つある。

### 農場の生活と植林地の出来事

農場で働いている人達の食事も重要な問題である。その問題の解決に手助けしてくれるのが自然の恵みである。森の木の実、新芽、雑草であり、鳥、獣、魚である。ある日、苗木を植えている時の出来事である。前夜人夫が詰めてくれた散弾銃を持って畑に出かけたところ、目の前をムッサンという黒いニワトリ大の鳥が横切って飛んで行った。慌てて狙いを定めてぶっ放したとたん、薬莢の後部の小さな衝撃盤が破れて、爆発した火薬のカスが目の中に入り大変なこととなった。しかし、暇をとて病院に行くわけにも行かず、植え付けが全部終わるまで片目で頑張った。終了と同時に空路サンパウロへ戻り、病院で目に入り込んだ異物を取り除いて貰った。異物が瞳を外れていたのが不幸中の幸だった。あの鳥、ムッサンが悠々と飛んで消えた光景が忘れられない。以後銃を手にしたことはない。

さて、畑のゴムはその年も順調な雨の恵みを受けてすくすくと育っていた。ただサウーバ蟻に新芽を食べられたり、苗が枯れたりするのでその被害は大きく、蟻退治に忙殺される毎日であった。この蟻は夜行性で始末が悪く、梢

まで登って葉を切り落として巣を持ち帰る。ゴムの木の樹液は夜間は木の中を活発に流動するが、日が昇るとゴム樹液の活動は止まり粘着力が増すため、日が昇るまで働き続けている蟻は、樹液が接着剤となって口がゴムの木から離れなくなりそのまま逃げられずに虜になる。高い梢のところで、暑い日中の直射日光を受けて死んでいるのを見ると滑稽でもあり、哀れでもある。

苗を本畑に植えてから2,3年は、植える前に火をいれて雑草も雑木も殺してあるので、除草にそれほど手間がかからず管理がやりやすかった。他の大農場では森林をブルドーザでなぎ倒して根も抜き取り、きれいに除草された農園に植えていた。また、除草はトラクタでするので、草も伐根からの新芽も生えず、いつ見てもきれいに整頓されていた。私の方は資金力もなく、管理は全部人力に頼らざるを得ない。そのうち3年を過ぎる頃には、雑草と雑木に押しまくられゴム園は雑木林みたいになって手がつけられなくなった。

そんなある日、融資金を受け取りに、いつものように銀行に行ったのだが、私に対する融資は打ち切りでもう出ないといわれた。お先真っ暗になって失意のまま関係当局に出向いた。融資を差し止められた理由は、ゴム園が雑木林のようになっていて、管理不充分で当局の指導に添っていないということであった。

### 融資金獲得の努力

私は資金力に乏しく融資の打ち切りは死活問題である。今までの努力が水の泡ではたまらないので当局のチーフに会い、「あなた方が今私に融資を打ち切ると、ゴム園は益々雑木雑草がはびこり将来ゴムの生産は出来ず、今まで受けた融資の返済も出来なくなります」と申し入れた。その時、横で聞いていた別の農場主が声を上げて笑ったのを覚えている。

チーフに申し入れをしただけでは不安だったので、町役場へ行った。この町の町長は初代の町長で、以前はこの地方のゴム植林事業の局長で、私を勧誘してゴム植林計画の第一号とした人である。私が日本人として、この



写真 3 野生蜜蜂の巣から蜜とプロポリスを採取している：木はマメ科の Garapera（床材にする）

地方最初の被融資者であり、道のない道を歩いて開墾した苦労もよく知っている人である。そんなこともあり、このロリバルという町長の一言で融資は再開された。それから又数年が経ち、あちこちの農場でゴム液収穫が始まった。ゴムの木の幹回りが 40 cm になれば収穫を始めてよいとのことだったが、私はまだ早いと判断し、もう 2 年待って収穫を始めた。植え付けてから 10 年目である。収穫を始めてみると他の農場よりも単位本数当たり 2 倍の収穫があった。

私のゴム園は収穫作業開始と共に人の出入りも多くなり、ゴムの木の葉も繁って地上に蔭を作り始めた。そのため自然と雑草もなくなってきた。これに對して、他の農場では機械力に便り、より早くより美しくということで除草をトラクタで行っている。ゴム園は見た目は美しく整備されているが、根にとって一番大切な表土のところをいつも根を切って耕すものだから、ゴムの木の成長はある程度のところで止まり、根の切られたところからは病原菌が入り、生産量は減り労賃もまかなうことが出来ず、その上单一作物の連作で土地の老朽化は進み、希望が持てずそのまま放置されているゴム園が増えつつある。私のゴム園は人力で管理しているため、人目からは哀れに見えたであろうが、雑草雑木の相乗作用で生産量も落ちずに健在である。

### 自然との共生

私のゴム園の場合、植えている面積は 30 ha であるが、ゴム園全体の面積は 35 ha を超えている。実はゴム園の真ん中に 5 ha 余りの森林を残したからである。ちょうど湖の中にある孤島のような形で原生林が残っている。その原生林

は全然手をつけていないし歩いたこともない森である。前面は幅 5 m 位の郡道で、その向こう側は延々と広がる原生林である。両側も原始林である。近くには幅 6 m 位、深さ 1~2 m の川が流れていって、人工的に塞き止めたところは大きな池になっている。

私のゴム園はこうしたところにあり原始の森と仲良く付き合ってくれていると思うし、初めから現在まで人力に頼ってきたため見た



写真 4 農場の中の通路傍の蝶の乱舞  
湿潤な場所である

目には整然としていないが、他の農場に比べるとゴムの木も太くたくましく育っている。

私の農場には、まだまだ原始林が残っているが、人跡のない森の中を歩いていて神聖な樹木、草葛に出会った時、小さな水の流れ、それも小さな湧き水のあるところを発見したりすると、もうたまらなく感動が湧いてきて卒倒しそうになる。地球の生物の始まりがこうした森の中で育まれたのを実感する。

この森の中の摂理、鳥達、他の動物達、魚達、昆虫達、はては菌類との関係を無視しては人類、いやすべての生物の存在はないと思うようになった。いわゆる先進国、文明国といわれる國の人達は、その生存競争を科学文明に求めて、止めどもなく突進しているが、人間本来の安らぎから遠ざかるばかりである。

### おわりに

ブラジルは16世紀の初めからヨーロッパ移民が開拓を初めて、現在も開拓が進められている。その根本思想は自然を人間に従属させるということである。自然の森の中で、森と共存して暮らしているインディオ達を追いやり、その中に文明が運んできたあらゆる産物を撒き散らし、同時に副産物である生物に有害な公害危険物を撒き散らしている。一方では、それに輪を掛けるように、地球上の人口が増加を続けている。創造主が作り出した原始自然は破壊され、食い潰され、消滅してしまいそうである。先進国、文明国の大害要素は既にアマゾンにも影響してきている。私も開拓してゴムを植えた。それがアグリカルチャーといわれるものかもしれないが、私はもうこれ以上原始の森に手を入れたくない。必要とあれば、既に開拓された所を再び開拓することにしようと思う。人間一人ひとりが、地球の資源には限りがあるということに気付いて、人口問題の解決に向かって欲しい。この点はその筋の専門家に特に期待しているところである。

(注) 著者は、このほかにも14種あげられたが、科名の分かるものだけをまとめた。属名、科名は森林総合研究所斎藤昌宏氏らのご協力によることを付記してお礼申上げます。(編集委員会)